

外界からの刺激に対する感受性の研究

—騒音, 他者, 環境への感受性と一般的感受性の関係—

宮原道子*

Sensitivities of External Stimulus

—Relationships of Sensitivities of Noise, Others, Environments and General Sensitivity—

Michiko MIYAHARA*

Two studies were conducted to investigate the relationship between sensitivities to light, odor, and interpersonal and to investigate the need for the functions of private space. Furthermore, the fitness of the model, including general sensitivity as the latent variable was examined by structural equation modeling. In study 1, the model demonstrating that general sensitivity affects noise, emotional sensitivities, and the discomfort arising from the environment, was favored. Subjects with high general sensitivities tend to be sensitive to noise, the environment, and emotional stimuli. Further, a noise-sensitive person tends to monopolize the private space. In study 2, the sensitivities to noise and nonauditory stimuli from the environment, external-preoccupational tendency, other-consciousness scale, and the need for the functions of private space were measured. The fitness of the model, including general sensitivity as the latent variable that affects the indices, was examined. In the study 2, the model demonstrating that general sensitivity affects the sensitivities to noise and nonauditory stimuli from the environment, external-preoccupational tendency, and other-consciousness scale, was favored. Subjects with high general sensitivities tend to be sensitive to external stimuli such as noise, other subjects, light, and odor and therefore are easily preoccupied, and they tend to monopolize the private space.

key words: noise sensitivity, general sensitivity, structural equation modeling

職場や学校で認知活動を行っているときに聞こえる他者の声やドアの開閉音などの聴覚刺激は騒音であり, 活動を妨げる主要因である (Hyggs, 2003; Landström, Söderberg, Kjellberg, & Nordström, 2002)。このような環境では, 騒音感受性が高い人の方が, 低い人よりも騒音による妨害を受けやすく (Anastai, 1964; Jonah, Bradley, & Dawson, 1981), 騒音の音量をより大きく感じ, 音や光を不快に感じる閾値が低い (Stansfield, Sharp, Gallacher, & Babisch, 1985)。そのために騒音感受性が高い人は

静かな環境下での認知活動を好み, その方が課題の遂行成績も良い (Ng & Turnbull, 1997)。さらに, 騒音感受性が高い人は匂い (Bell, Hardin, Baldwin, & Schwartz, 1995; Szarek, Bell, & Schwartz, 1997; Nordin, Millqvist, Lowhagen, & Bende, 2003; Nordin, Broman, & Wulff, 2005) や, 他者や出来事という情動的な反応をもたらす刺激にも敏感であり, 環境を否定的に評価する傾向を持つ (Iwata, 1992)。以上の先行研究から, 騒音感受性が高い人は騒音に対する反応について正確で一貫した自己認知を持ち, 光や匂いという環境からの刺激への感受性も高く, 刺激を与える環境を否定的に評価していると考えられる。さらに, 騒音感受性が高い

* 京都大学大学院教育学研究科教育認知心理学講座
Department of Cognitive Psychology in Education, Kyoto University

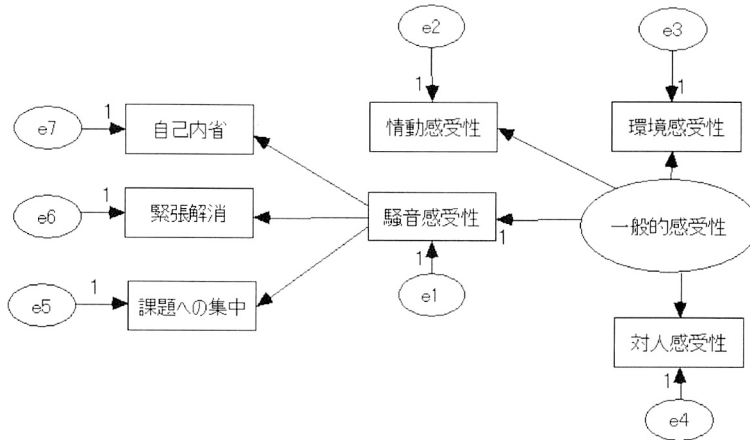


Fig. 1 感受性尺度とプライベート空間機能尺度の予測モデル

人は、騒音以外の物理的刺激や情動的刺激の感受性が高いという関係の背後には、刺激の属性を超えた一般的感觉性の存在が示唆される (Nordin et al., 2003)。つまり、騒音感受性、騒音以外の物理的刺激や情動的刺激への感受性は、刺激の属性によらない一般的感觉性と、それぞれの刺激に特有の感受性の2つから影響を受けていると考えられる (仮説1)。

また、上述したように騒音感受性が高い人は、環境からの刺激に対する感受性が高いために、そのような刺激を受けずに済む空間を大切にしている傾向が強いと予測される。泊・吉田 (1998a; 1998b) は人が社会的役割から離れて他者の目を気にせず振舞える自分固有の領域 (時間や空間) をプライベート空間と定義し、自分一人で専有できる空間は緊張解消 (疲れたときに心身を休ませることができる時間や空間)、自己内省 (自分自身のことをじっくり考えられる時間や空間)、課題への集中 (周囲に煩わされることなく自分の課題に取り組める時間や空間) の3機能、気遣いのいらぬ他者と共有する空間は率直なコミュニケーション機能 (親しい人と共有する時間や空間)、他者への気兼ねがいらぬ自己解放できる空間は気分転換 (自分を向上させ、新たな自己を開発できるような時間や空間)・情緒的解放 (自分の感情を自由に表出できる自分だけの時間や空間)・自己変身 (普段と違う自分を演出できるような時間や空間) の3機能という3空間7機能に構造化されることを示した。騒音感受性が高い人は、他者が存在せず環境からの刺激を避けられる“自分一人で専有できる空間”を強く求めると予測される

(仮説2)。

以上の仮説を検討するために、本研究では一般的感觉性を潜在変数とした Fig. 1 のモデルに対して共分散構造分析を行い、データに対するモデルの適合度を検討する。仮説1は潜在変数である一般的感觉性から、観測変数である騒音感受性、騒音以外の光や匂い、他者など物理的刺激への感受性への有意なパスの存在を予測する。仮説2は、観測変数である騒音感受性から、同じく観測変数であるプライベート空間機能尺度の“自分一人で専有できる空間”への有意なパスの存在を予測する。

調査 1

方法

被験者 大学生男女 140 名 (男性 58 名、女性 82 名、平均年齢 22.1 歳) であった。

質問紙の構成は以下のとおりであった。

騒音感受性尺度 Weinstein (1978) の騒音感受性尺度に基づいた日本語版の騒音感受性尺度 (岩田, 1981) を用いた。21 項目で構成されており、各項目が自分の感じ方や考えにどれほど当てはまるかを“全く当てはまらない”から“非常に良く当てはまる”の5段階で評定を求めた。得点が高いほど騒音感受性が高いことを表す。

騒音以外の刺激に対する感受性の測定 Iwata (1992) と同じ 14 項目を用いた。環境への否定的評価を問う 4 項目、光や匂いに対する感受性を測る 3 項目、他者の内的状態への感受性を測る 3 項目、情動的反応を引き起こす外的な事象への感受性を測る

Table 1 騒音感受性の因子分析結果

項目内容	I	共通性
私は騒音に敏感である	0.71	0.51
たいていの騒音にはなかなか慣れることができない	0.70	0.48
周りが騒がしいときにはいらいらする	0.65	0.43
騒音が私の神経にさわり、いらいらさせることが時々ある	0.65	0.42
一人でいたいときには、外部の騒音によって気分が乱される	0.63	0.40
静かに話をしている、図書館の中での他人の話は私の気を散らせる	0.62	0.38
睡眠や仕事を妨げる騒音を出す人には腹がたつ	0.59	0.35
ちょっとした音にも気が散りやすい	0.56	0.32
騒がしい場所でくつろぐことは難しい	0.54	0.29
仕事や勉強の場所が騒がしいときには窓や戸をしめたり、他の場所へ移ろうとする	0.50	0.25
消防署の近くのアパートは、火事には安全でも騒々しいので、住みたくない	0.45	0.20
私は騒音で目がさめやすい	0.44	0.19
安くてよいアパートがあっても騒がしいところには住みたくない	0.41	0.17
陸上の交通騒音をもっと減らすべきである	0.40	0.16
私は耳栓をしたいと思うことがよくある	0.38	0.15
完全な静けさが欲しいと思うときがよくある	0.37	0.14
たとえ安くて環境が良くても、隣の音が聞こえる壁の薄いアパートには住みたくない	0.36	0.13
因子寄与	5.30	
累積寄与率	25.3	

Table 2 騒音以外の刺激に対する感受性の因子分析結果（バリマックス回転後の因子負荷量）

項目内容	I	II	III	共通性
大気汚染や悪臭のせいで、私は気分が悪い	0.65	-0.03	0.13	0.44
輝く無数のネオンサインを見ていると、いらいらしてしまう	0.65	-0.02	-0.19	0.46
人や建物や車といったものがたくさん視界に入ってくると、いらいらしてしまう	0.53	-0.02	0.10	0.29
大気汚染や悪臭は耐えがたいほどである	0.38	0.08	0.19	0.19
特に注意を向けなくても、他人に気を使うことができる	-0.08	0.81	-0.05	0.67
他人の気持ちを傷つけないように気を配るのは簡単である	0.01	0.51	-0.14	0.29
私は他人の気持ちや、その人の状況に敏感である	0.19	0.48	0.15	0.29
自然に触れると、感動を受けやすい	-0.06	0.15	0.56	0.34
都市部の交通渋滞はひどすぎる	0.14	0.03	0.48	0.25
つい先ほど起こった出来事によって、気分が影響される	0.18	-0.08	0.41	0.21
時々、音楽に感動してしまつて鳥肌が立つことがある	0.03	-0.10	0.35	0.14
因子寄与	1.60	1.37	0.97	3.95
累積寄与率	14.04	23.49	30.2	

4 項目であった。各項目が自分の感じ方や考えにどれほど当てはまるかを“全く当てはまらない”から“非常に良く当てはまる”の 5 段階で評定を求めた。

プライベート空間機能尺度 泊・吉田(1998b)が作成した 31 項目を用いて、プライベート空間の 3 空間 7 機能を大切にす程度について 7 段階評定を求めた。高得点ほど各機能の空間を大切にしていることを表す。

手続き 大学での心理学の授業を利用して、調査を実施した。所要時間は約 20 分であった。

結果と考察

まず、Iwata (1972) に従って騒音感受性尺度 21 項目に対して主因子法による因子分析を行い、固有値の推移と解釈可能性から 1 因子を抽出した ($\alpha = 0.86$)。因子負荷量が 0.35 以上であった 17 項目で構成された因子を騒音感受性因子と命名し、項目評定値の合計を騒音感受性の尺度得点とした (Table 1)。プライベート空間機能尺度は、泊・吉田(1998b)の採点方法に従って各機能の項目への評定値を合計して尺度得点とした ($\alpha = 0.58 \sim 0.88$)。騒音以

Table 3 各尺度の相関係数と平均、標準偏差

	1)	2)	3)	4)	5)	6)	7)	8)	9)	10)	11)
1) 騒音感受性		0.44**	-0.01	0.28**	0.30**	0.26**	0.27**	-0.05	0.07	0.05	-0.02
2) 環境感受性			0.03	0.17*	0.13	0.20*	0.06	-0.12	0.17*	0.10	0.07
3) 対人感受性				-0.02	0.16	0.06	0.00	0.11	0.02	0.06	0.04
4) 情動感受性					0.21*	0.27**	0.13	0.25**	0.30**	0.09	0.12
5) 緊張解消						0.51**	0.41**	0.27**	0.35**	0.47**	0.27**
6) 自己内省							0.54**	0.37**	0.48**	0.50**	0.50**
7) 課題への集中								0.41**	0.34**	0.50**	0.45**
8) 率直なコミュニケーション									0.49**	0.47**	0.36**
9) 気分転換										0.45**	0.52**
10) 情緒的解放											0.57**
11) 自己変身											
平均	72.1	10.9	9.2	15.8	27.6	28.5	18.7	27.3	15.6	14.5	20.7
SD	12.5	3.1	2.4	2.6	7.3	6.5	4.3	6.2	2.9	3.5	5.6

**1%水準で有意 *5%水準で有意

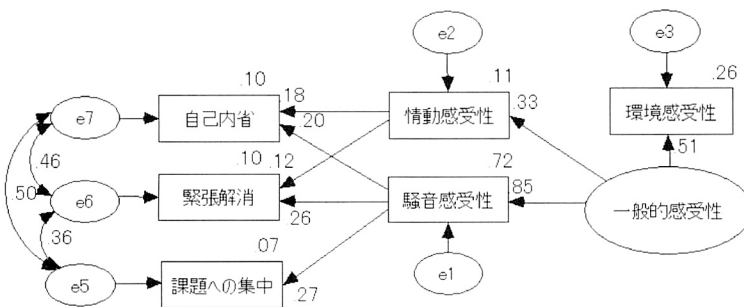


Fig. 2 感受性尺度とプライベート空間機能尺度の最終モデル

外の刺激に対する感受性を測定する質問 14 項目について主因子法による因子分析を行い、固有値の推移と解釈可能性から因子負荷量が 0.35 以上の 11 項目を用いて 3 因子を抽出した (Table 2)。第一因子は環境を不快に感じる傾向である”環境感受性 (4 項目, $\alpha=0.63$)”, 第二因子は人への配慮を示す傾向である”対人感受性 (3 項目, $\alpha=0.62$)”, 第三因子は情動的な反応を示す傾向である”情動感受性 (4 項目, $\alpha=0.51$)”と命名した。いずれも α 係数はあまり高くなかった。各因子項目への評定値合計を各尺度得点とした。次に、各尺度得点の基礎統計量と尺度間の相関係数を算出した (Table 3)。最後に各尺度得点を用いて Fig. 1 のモデルを検証したところ、適合度指標が $GFI=.829$, $AGFI=.658$, $RMSEA=.205$ と低かったため、ワルド検定によって有意ではなかった一般的感受性から対人感受性へのパスを削除した。また、プライベート空間機能の

下位尺度である”自己内省”, ”緊張解消”, ”課題への集中”間の相関の高さを考慮して各誤差変数間 ($e5, e6, e7$) に共分散を仮定した。すると適合度指標は $GFI=.989$, $AGFI=.942$, $RMSEA=.035$ となり、モデルは受容できると判断した。最終的なモデルを Fig. 2 に示した。図中のパス係数はすべて 5%水準で有意である。

Fig. 2 より一般的感受性が高いほど騒音感受性、環境感受性、情動感受性が高く、その影響力はこの順に弱まる。また、騒音感受性が高いほどプライベート空間の課題への集中、緊張解消、自己内省という機能を大切に、情動的感受性が高いほど自己内省と緊張解消機能を大切にしている。したがって仮説 1 の一部と仮説 2 が支持された。

ところが、対人感受性に対しては一般的感受性からの影響が見られず、仮説 1 の一部は支持されなかった。この結果は Iwata (1992) と同様であり、そ

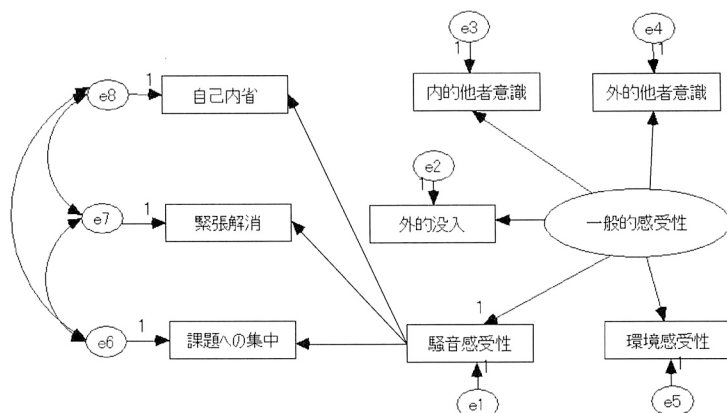


Fig. 3 感受性尺度とプライベート空間機能尺度の予測モデル 2

の原因として対人感受性尺度の項目が他者への共感性に偏っていた可能性が挙げられる。もし対人感受性が一般的感受性からの影響を受けるならば、その影響は他者への共感性よりも、他者の外見や内面に注意をひきつけられるという側面に強く現れると考えられる (Iwata, 1992)。この予測を検討するために、調査 2 では他者の外見や内面への注意を測定する他者意識尺度 (辻, 1983) を用いる。

また、調査 1 の騒音以外の刺激に対する感受性の測定項目は 11 項目による 3 因子構造と分析されたが、1 因子あたりの項目数が少なく、 α 係数もあまり高くなかった。この点を改善するために、調査 2 では光や匂い以外の刺激への反応を測定する項目を増やして因子分析を行い、調査 1 と同様に一般的感受性からの影響を検討する。項目選定については、環境からの刺激に対する反応を選ぶために社会的迷惑行動リスト (吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斉藤・森・石田・北折, 1999) を参照した。

さらに、一般的感受性が高く、環境からの刺激に対する感受性が高い人は、刺激の属性によらず外的な刺激や対象に注意をひきつけられやすいという特徴を持つと予想される。この予測を検討するために、調査 2 では外的な対象に注意をひきつけられ、その状態が持続しやすい傾向である外的没入尺度 (坂本, 1997) を用いる。

調査 2

調査 2 では、調査 1 の尺度を改良し、外的没入尺度 (坂本, 1997) を加えて一般的感受性が外的刺激への感受性に及ぼす影響を検討する。調査 1 と同様

に、騒音、環境、他者の外見と内面に対する感受性には刺激の属性によらない一般的感受性が影響を及ぼすと予測される (仮説 1)。さらに、外的な刺激に注意をひきつけられる傾向である外的没入にも一般的感受性が影響を及ぼすと予測される (仮説 2)。最後に、調査 1 と同じく騒音感受性が高い人は、プライベート空間に対して“自分ひとりで専有できる空間”という機能を強く求めると予測される (仮説 3)。具体的には、一般的感受性を潜在変数として取り入れた Fig. 3 のモデルに対して共分散構造分析を行い、データに対するモデルの適合度を検討する。なお、調査 1 の結果からプライベート空間機能の下位尺度である“自己内省”、“緊張解消”、“課題への集中”の各誤差変数間 (e5, e6, e7) に共分散を仮定した。仮説 1 は、潜在変数である一般的感受性から、観測変数である騒音感受性、騒音以外の刺激に対する感受性、他者意識尺度へのパスの存在を予測する。仮説 2 は、潜在変数である一般的感受性から観測変数である外的没入へのパスの存在を予測する。仮説 3 は、観測変数である騒音感受性から、同じく観測変数であるプライベート空間機能尺度の“自分一人で専有できる空間”への有意なパスの存在を予測する。

方法

被験者 調査 1 とは異なる大学生および専門学校生 348 名を対象とした (男性 81 名、女性 267 名、平均年齢 23.6 歳)。

質問紙は以下の尺度で構成された。各項目が自分の感じ方や考えにどれほど当てはまるかを“全く当

Table 4 調査2の騒音感受性の因子分析結果

項目内容	I	共通性
私は騒音に敏感である	0.77	0.56
ちょっとした音にも気が散りやすい	0.70	0.48
騒音が私の神経にさわり、いらいらさせることが時々ある	0.68	0.45
周りが騒がしいときにはいらいらする	0.67	0.43
たいていの騒音にはなかなか慣れることができない	0.67	0.43
仕事や勉強の場所が騒がしいときには窓や戸をしめたり、他の場所へ移ろうとする	0.59	0.35
静かに話をしている、図書館の中での他人の話は私の気を散らせる	0.59	0.34
一人でいたいときには、外部の騒音によって気分が乱される	0.58	0.33
映画を見ているときのひそひそ話や物音には気が散りやすい	0.57	0.32
私は耳栓をしたいと思うことが良くある	0.54	0.31
睡眠や仕事を妨げる騒音を出す人には腹がたつ	0.52	0.27
騒がしい場所でくつろぐことは難しい	0.48	0.25
私は騒音で目がさめやすい	0.47	0.22
完全な静けさが欲しいと思うときがよくある	0.44	0.22
たとえ安くて環境が良くても、隣の音が聞こえる壁の薄いアパートには住みたくない	0.43	0.18
消防署の近くのアパートは、火事には安全でも騒々しいので、住みたくない	0.36	0.16
因子寄与	45.87	
累積寄与率	28.0	

てはまらない”から“非常に良く当てはまる”の5段階で評定を求めた。騒音感受性尺度とプライベート空間機能尺度は調査1と同一のものを用いた。

他者意識尺度 他者意識尺度(辻, 1993)より内的他者意識7項目と外的他者意識4項目を用いた。内的他者意識とは他者の気持や感情などの内面を敏感に感じとり、理解しようとする傾向である。また、外的他者意識とは、他者の服装や化粧など外見に現れた特徴へ注意や関心を示す傾向である。どちらの尺度も高得点ほどその傾向を強く持つことを表す。

外的没入尺度 没入尺度(坂本, 1997)から外的没入尺度8項目を用いた。外的没入とは、ある1つの外的な対象に向けた注意が持続しやすい傾向である。高得点ほど外的没入傾向が高いことを示す。

騒音以外の物理的刺激に対する感受性の測定 光や臭い、環境など、聴覚刺激以外の物理的刺激に対する感受性を測定する12項目を用いた。調査1とIwata (1992)で用いた非聴覚刺激への感受性を問う3項目と環境への感受性を問う4項目に加えて、社会的迷惑行動リスト(吉田ら, 1999)を参照して独自に作成した5項目で構成された。高得点ほど、光や匂いなどの物理的刺激に対する感受性が高く、不快に感じる傾向を示す。

手続き 大学および専門学校での心理学の授業を利用して、調査を実施した。所要時間は約20分であった。

結果と考察

内的他者意識尺度($\alpha=0.86$)、外的他者意識尺度($\alpha=0.76$)、外的没入尺度($\alpha=0.78$)、プライベート空間機能尺度($\alpha=0.67\sim0.90$)は、採点方法に従って各尺度項目に対する評定値を合計して尺度得点とした。騒音感受性尺度は調査1と同様の手続きで因子負荷量が0.35以上の16項目で構成された騒音感受性因子を抽出し、騒音感受性尺度得点を算出した($\alpha=0.88$, Table 4)。騒音以外の感受性を問う12項目への評定値に対して主因子法による因子分析を行い、固有値の減少傾向と解釈可能性に基づいて1因子解が適当と判断した。因子負荷量が0.35以上の10項目からなる1因子($\alpha=0.71$)を抽出し、環境感受性因子と命名した(Table 5)。この10項目への評定値を合計して環境感受性の尺度得点とした。次に、各尺度得点の基礎統計量と相関係数を算出した(Table 6)。最後に各尺度得点を用いてFig. 3のモデルを検証したところ、適合度指標がGFI=.914, AGFI=.818, RMSEA=.138と低かったため、内的他者意識、外的他者意識、外的没入間の相関の高さを考慮して各誤差変数間(e2, e3, e4)に共分散を仮定した。さらに、修正指数と各適合度指標の改善の度合いをもとにモデルの修正を繰り返して最終的なモデルを導きFig. 4に示した。適合度指標はGFI=.984, AGFI=.954, RMSEA=.047となり、モデル

Table 5 調査2の騒音以外の刺激に対する感受性の因子分析結果

項目内容	I	共通性
大気汚染や悪臭のせいで、私は気分が悪い	0.56	0.31
大気汚染や悪臭は耐えがたいほどである	0.51	0.26
輝く無数のネオンサインを見ていると、いらいらしてしまう	0.48	0.23
灰皿から上っているタバコの煙に近づく気分が悪くなる	0.47	0.22
人や建物や車といったものがたくさん視界に入ってくると、いらいらしてしまう	0.46	0.21
都市部の交通渋滞はひどすぎる	0.42	0.18
電車やバスなどの中で、強い香りの香水や整髪剤をつけている人のそばに立つ気分が悪くなる	0.42	0.18
都市部には自然環境はほとんど残されていない	0.41	0.17
すれ違う車のヘッドライトがまぶしいとイライラしてしまう	0.39	0.15
都市部の環境は人が住むにはふさわしくない	0.39	0.15
因子寄与	2.15	
寄与率	24.49	

ルは受容できると判断した。図中のパス係数はすべて5%水準で有意である。

Fig. 4 より一般的感受性が高いほど騒音感受性、環境感受性、内的他者意識、外的没入、外的他者意識が高く、一般的感受性からの影響力はこの順に弱まる。さらに、騒音感受性と外的没入が高いほどプライベート空間の緊張解消と自己内省機能を大切にしており、内的他者意識が高いほど自己内省という機能を大切にすることが示された。したがって仮説1, 2, 3 はすべて支持された。

Fig. 4 より、一般的感受性は騒音、他者、環境への感受性に影響を及ぼすことが示された。つまり、一般的な感受性の高い人は騒音や環境からの刺激に対する感受性が高く、他者の内面及び外見に注意を向ける傾向があり、外的な刺激や対象に注意がひきつけられるとそこから注意をそらしにくい人であることが示された。内的他者意識と外的没入の誤差変数間に共変動があることから、他者の内面について思い悩み、その状態から気をそらしにくい傾向があると考えられる。

また、Fig. 4 のモデルから騒音や他者に対して感受性が強く注意をひきつけられやすい人は、そのような刺激を受けずに自分だけが専有できる空間を大切にしていることがわかった。さらに、自分が専有できる空間を大切にすることは理由の種類によって異なる。騒音は課題への集中を妨げ、緊張をもたらすが、自己内省は妨げにくいために、騒音感受性が高い人は課題に集中でき、緊張を緩和する空間を大切にしていると考えられる。一方、他者の存在は自己内省を妨げるが、緊張の解消や課題への集中の妨

げとはなりにくいために、内的他者意識の高い人は自己内省できる空間を大切にしていると考えられる。

総 合 考 察

調査1, 2 より、刺激の属性を超えた一般的な感受性が騒音や光、匂いといった物理的刺激や他者に対する感受性に影響を与えることが示唆された。つまり、異なる属性を持つ刺激に対する感受性は、刺激の属性によらない一般的な感受性と、それぞれの刺激に特有の感受性の2つから影響を受けるといえる。また、一般的な感受性が高い人は、外的な刺激に注意をひきつけられやすく、その状態を持続しやすい傾向を持つことも明らかになった。以上の結果から、騒音への感受性が高い人は他の物理的刺激や他者という異なる属性の刺激への感受性も高く、刺激に対して注意をひきつけられやすい人といえる。そして、そのような刺激を受けずに一人で専有できる機能を持つプライベート空間を大切にしている。

本研究では、質問紙調査とモデル検討によって上記の感受性間の関係を示した。被験者の主観的な評価に基づく質問紙調査の結果から、人は環境に対する自分の反応についてある程度正確で一貫した認知を持ち、自分がどのような環境を快適に感じるかを把握していることが示された。今後は本研究のモデルを実証する実験的検討が望まれる。騒音感受性の高群と低群の光や匂いの閾値を精神物理学測定法によって測定し、両群で有意差があるかどうかを検証する。あるいは認知課題を実験室で被験者単独で行う場合と、複数の被験者が背中合わせで他者の存在を感じるが見えない状況で課題を行う場合と、他

Table 6 各尺度の相関係数と平均，標準偏差

	1)	2)	3)	4)	5)	6)	7)	8)	9)	10)	11)	12)
1) 騒音感受性		0.40**	0.30**	0.18**	0.23**	0.23**	0.12*	0.20**	0.07	0.01	0.12	0.07
2) 環境感受性			0.11*	0.12*	0.13*	0.11*	0.01	0.05	-0.03	-0.06	0.01	0.03
3) 内的対人意識				0.14**	0.37**	0.21**	0.34**	0.20**	0.20**	0.21**	0.14**	0.15**
4) 外的対人意識					-0.03	0.01	-0.02	-0.10	-0.03	0.03	0.09	0.06
5) 外的没入						0.27**	0.23**	0.35**	0.23**	0.24**	0.21**	0.17**
6) 緊張解消							0.69**	0.54**	0.34**	0.43**	0.67**	0.46**
7) 自己内省								0.59**	0.43**	0.48**	0.52**	0.56**
8) 課題への集中									0.38**	0.40**	0.44**	0.42**
9) 率直なコミュニケーション										0.52**	0.43**	0.40**
10) 気分転換											0.59**	0.60**
11) 情緒的解放												0.62**
12) 自己変身												
平均	52.9	30.2	25.0	13.7	28.2	26.0	26.8	19.3	26.5	15.2	14.0	19.4
SD	11.7	6.2	5.3	3.6	5.4	5.7	7.0	4.6	6.6	3.4	3.8	5.7

**1%水準で有意 *5%水準で有意

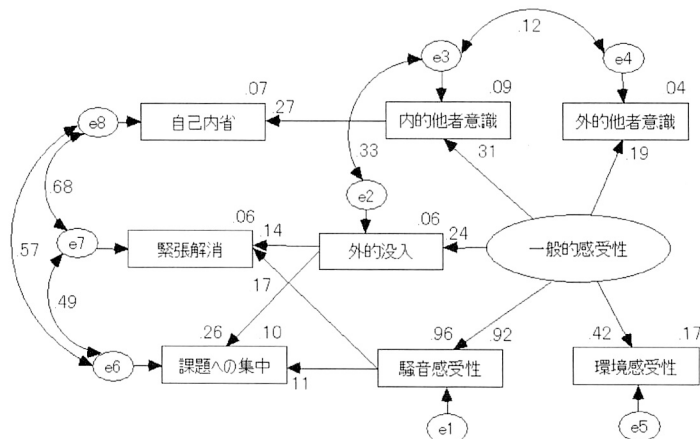


Fig. 4 感受性尺度とプライベート空間機能尺度の最終モデル 2

者の様子が見える状況で課題を行う場合の遂行成績を比較して、他者の様子が見えると相手の外見や内面に注意をひきつけられてしまうために、認知課題への注意集中が妨げられ他の状況よりも遂行成績が低下するかどうかを検討することでモデルの妥当性が検証できると期待される。また、外的没入尺度が高い人は抑うつ傾向が高い(坂本, 1997) ため、抑うつ傾向と感受性との関連を検討することも人が環境から受ける影響を解明する上での有効なアプローチになると期待される。

引用文献

- Anastasi, A. 1964 *Fields of Applied Psychology*. Tokyo: McGraw Hill.
- Bell, I. R., Hardin, E. E., Baldwin, C. M., & Schwartz, G. E. 1995 Increased limbic system symptomatology and sensitizability of young adults with chemical and noise sensitivities. *Environmental Research*, **70**, 84-97
- Hyggs, S. 2003 Classroom experiments on the effects of different noise sources and sound levels on long-term recall and recognition in children. *Applied Cognitive Psychology*, **17**, 895-914
- 岩田 紀 1981 騒音感受性と性及び音響関連反応の関係 徳島大学学会紀要 教育科学, **30**, 41-45.
- Iwata, O. 1992 The relationship of social evaluation and subjective sensitivity of environmental evaluation. *Psychologia*, **33**, 69-79
- Jonah, B. A., Bradley, J. S., & Dawson, N. E. 1981 Predicting individual subjective responses to traffic noise. *Journal of Applied Psychology*, **66**, 490-501.
- Landström, U., Söderberg, L., Kjellberg, A., & Nordström, B. 2002 Annoyance and performance effects of nearby speech. *Artikel. Acta acustica united with acustica*, **88**, 549-553
- Nordin, S., Broman, D. A., & Wulff, M. 2005 Environmental odor intolerance in pregnant women. *Physiology & Behavior*, **84**, 175-179.
- Nordin, S., Millqvist, E., Lowhagen, O., & Bende, M. 2003 The chemical sensitivity scale: Psychometric properties and comparison with the noise sensitivity scale. *Journal of Environmental Psychology*, **23**, 359-367
- Ng, C. F. & Turnbull, J. 1997 Preference for noise and effectiveness of studying. *Perceptual and Motor Skills*, **85**, 155-160.
- 坂本真士 1997 自己注目と抑うつの社会心理学 東京大学出版会.
- Stansfeld, S. A. 1992 Noise, noise sensitivity and psychiatric disorder: Epidemiological and psychophysiological studies. *Psychological Medicine, Monograph Supplement*, **22**.
- Stansfield, S., Sharp, D. S., Gallacher, J., & Babisch, B. 1985 Sensitivity to noise in a community sample: Measurement of psychiatric disorder and personality. *Psychological Medicine*, **15**, 243-254.
- Szarek, M. J., Bell, I. R., & Schwartz, G. E. 1997 Validation of a brief screening measure of environmental chemical sensitivity: The chemical odor intolerance index. *Journal of Environmental Psychology*, **17**, 345-351.
- 泊 真見・吉田富二雄 1998a プライベート空間の心理的意味とその機能 筑波大学心理学研究, **20**, 173-190.

- 泊 真見, 吉田富二雄 1998b プライベート空間機能尺度の作成および信頼性, 妥当性の検討 日本社会心理学会第 39 回大会発表論文集, 90-91.
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房.
- Weinstein, N. D. 1978 Individual differences in reactions to noise: A longitudinal study in a college dormitory. *Journal of Applied Psychology*, 63, 458-466.
- 吉田俊和, 安藤直樹, 元吉忠寛, 藤田達雄, 廣岡秀一, 斉藤和志, 森久美子, 石田靖彦, 北折充隆 1999 社会的迷惑に関する研究 (1) 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 46, 53-73.
- (受付: 2006. 9. 11, 受理: 2007. 3. 28)